

東アジアを調査する
－台湾語教育と媽祖信仰を通して－

柳 静我・柳原 邦光・浅田 萌・池本愛里奈
岡田紗希子・栗田 瑞穂・徐 元俊

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第12巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.12 / No.1

平成 27 年 8 月 21 日 発行 August 21, 2015

東アジアを調査する

— 台湾語教育と媽祖信仰を通して—

柳 静我*・柳原邦光*・浅田 萌**・池本愛里奈**・岡田紗希子**
栗田瑞穂**・徐 元俊**

A Study on East Asia: A Case Study of Education of Taiwanese and Mazu Belief

YU Jeungah*, YANAGIHARA Kunimitsu*, ASADA Moe**, IKEMOTO Erina**,
OKADA Sakiko**, KURITA Mizuho**, SEO Wonjun **

キーワード：海外地域調査, 地域文化, 台湾語, 媽祖信仰

Key Words: Overseas Regional Research, Regional Culture, Tawanese, Mazu belief

はじめに

鳥取大学地域学部では段階的に地域について学ぶことになっている。まず、1年次で「地域学入門」（学年必修科目）で地域学に関する基礎知識と実践的取り組みについて学び、2年次になると、「地域調査実習」（学科単位で行う学年必修科目）で実際に地域に入って調査する。期間は地域環境学科の1年半を除いて、他の3学科は1年間である。今回報告する地域文化学科の調査実習の年間スケジュールを紹介すると、4月の第1週に教員がプレゼンテーションを行って学生から希望を募り、4つにグループ分けする。第2週からそれぞれのグループで基礎的な学習から始めて、テーマを決め、現地調査を行う。10月末に学部内で中間発表を行い、翌年1月末に鳥取県民文化会館で地域調査実習発表会を行って成果を公にする。最後の課題が報告書の作成で、翌年度の5月頃完成させる。3年生になると、「地域学総説」（学年必修科目）で地域学¹を理論的に学び、それまでの蓄積の上に4年生で卒業研究を行う。したがって、地域調査実習は、実際に仲間と地域に入って経験を積むとともに調査方法など基礎的なことを修得する唯一の機会なのである。この意味で、4年間の育成システムのなかで重要な位置を占めている。したがって、どの学科でも教員は授業内容を充実させるために様々な工夫を重ねているのである。

本稿は、地域文化学科の4つのグループのうち「東アジアグループ」が2014年度に行った台湾調査に関する研究報告と、海外調査の方法と効果に関する考察である。地域文化学科で初の海外調査となったが、後に詳述するように明確な意図をもって海外を選んだ。本稿で紹介・検討するのは、主に現地調査に入る前の文献に基づく研究から調査計画の策定、現地調査、その後の研究、発表、報告書の作成までのすべてのプロセスと、学生たちの研究成果、そして研究において学生たちが何を得たのかということである。教員としては、海外調査をするにあたってどのような工夫をし、それが有効だったのかどうか、考えたい。本稿全体としては、海外での地域調査が学生教育においてもつ意味も考え

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

** 鳥取大学地域学部地域文化学科3年

たい。

第1章では、1年間の調査実習の概要を紹介する。第2章は学生たちの研究報告である。台湾における言語問題と媽祖信仰の分析を通して台湾の文化形成とその現状に迫る。第3章では、今回の地域調査実習を検証し、その成果と課題について考える。「おわりに」では、東アジアグループの地域調査実習を単発の試みにしてしまうのではなく、その成果を活かしきるためにどのような工夫をしているのかを紹介して、考察を終えたい²。

第1章 台湾調査実習の概要

(1) 渡航までの準備

調査グループを立ち上げるにあたって、「東アジア」を対象に選んだのは次のように考えたからである。地域文化学科の場合、「地域文化」というと、とても小さく受けとめられがちである。たとえば、「地域文化？ ああ、鳥取のことを勉強するんですね」とよくいわれる。鳥取は大学の所在地であるから、研究対象にするのは当然のことである。しかし、実際には学科教員の多くは欧米やアフリカ、中国など外国の文化が専門で、鳥取とか日本のことだけを研究教育しているわけではない。ひとつにはそのことを形ではっきり示したかったのである。また、広域的な地域(mega-region)も研究対象であることを示して、これまでの狭くとらえられがちな枠組みを大きく変えたかった。ローカルな空間だけでなく、もっと大きな空間で、国家という枠組みを越えて、あるいはいったん脇において、さまざまなつながりや関係性から生まれ変化していくひとつの世界を考えてみたい、地域調査実習という授業を学生たちが「つながりや関係性の網の目を捉えるまなざし」を鍛える場に行きたくないか、そう思ったのである。

それではなぜ東アジアなのかといえば、陸地に比べて人やモノの移動が容易な東シナ海を介してさまざまなつながりや関係性が重なり合い、変化していく様子を見ることができないのではないかと、わたしたちにとってそのような複雑な重なり合いとその変化を歴史的に捉える長期的な視点が今こそ求められているのではないかと考えたのである³。このような観点から最初に読むべき文献として選んだのが、羽田正編、小島毅監修『東アジア海に漕ぎだす 1 海から見た歴史』（東京大学出版会、2013年）である。

地域調査実習の授業は金曜日の4,5時間目なので、4時間目を文献を読む時間にあてて、同書を通じて大きな視点を学びながら、具体的なテーマを決定できるように努めた。一緒に読み進むなかで、学生たちは中国福建省の小島に発して華人の移動とともに台湾や東南アジアなど各地に広がったとされる媽祖信仰になぜか敏感に反応した。この信仰が今日もっとも盛んなのが台湾ということで、中国、韓国、台湾の候補地から台湾をフィールドに決めて、台湾史など関係する文献を分担して読み進めた。そうするなかで、台湾には複雑な歴史的事情から言語問題があることがわかり、再び「ここには何かある」という直感にしたがって、台湾における言語問題を2つ目の研究テーマとした。ここまでは最初の文献こそ教員が選んだが、それ以外はすべて学生たち自身が話し合っただけで決めたことである。

授業の進め方としては、180分も文献を読むのは疲れてしまうので、文献は4時間目だけにし、必要に応じて台湾に関するDVDやインターネットの映像をみた。読み進めるうちに、学生の希望がはっきりしてきたので、それにしたがって媽祖グループと言語グループに分かれて小さな報告を繰り返し

行って、調査すべき点を徐々に絞り込んでいった。台湾に行く前に論文を含めて様々な文献を読んだが、それぞれのグループが読んだ中心的な文献といえば、媽祖グループが朱天順『媽祖と中国の民間信仰』（平河出版社、1996年）、言語グループの場合は菅野敦志『台湾の言語と文字』（勁草書房、2012年）である。

5時間目は中国語の学習に使った。「フィールドワークに行くのに言葉が全く分からないようではどうにもなりません。文化を知るにはまずは言葉からです」との中国史が専門の柳静我教員の力強い一言で、柳教員に中国語を教わることになったのである。意外なことに、学生たちはみな素直に中国語の勉強を始めた。第2外国語として学んだのはフランス語やスペイン語、韓国語だったという学生もいたが、楽しい時間になったようである。こうして東アジアグループでは、調査対象に応じて、その国の言語を学ぶことが当然と考えられるようになった。因みに、2015年度の学生たちも、今、同じように中国語を学んでいる。

次に台湾での調査計画の立案であるが、柳教員が電話やメール等で現地の方々と協議しながら、学生たちとともに作成した。協力してくださったのは、主に柳教員の友人である高雄師範大学の呉令清先生と周東怡博士（東京大学で博士号を取得）、ほかに楊朝傑先生（媽祖研究者）と陳金泉先生（幼稚園・小学校の台湾語担当教員）である。いうまでもないことであるが、現地調査では現地の人たちの協力が欠かせない。今回は、言語調査については、幼稚園と小学校で授業を参観し、現場の先生たちや校長先生のお考えを聞くことにした。これは陳金泉先生のご尽力で可能になった。また、日本統治下で日本語教育を受けて育ち、1945年以後は国民党政府によって国語の使用を強制された呉景林さんに詳しくお話をうかがうことにした。因みに呉さんは呉令清先生のお父さんである。媽祖廟の調査には、呉先生の他に専門家である楊朝傑先生にご協力をお願いした。調査する媽祖廟の決定から具体的なスケジュールまで多くの助言を得たほか、台中での現地調査では同行の上、それぞれの廟について詳しく説明をしていただいた。

調査では、中国語（台湾の場合は北京語で「国語」といわれている）の他に台湾語も使用されるので、通訳として地域文化学科の留学生2名（中国・台湾）と台湾に留学した経験のある学生1名⁴に同行をお願いした。他に韓国留学経験のある4年生1名が参加を希望したので、学生13名と教員2名で総勢15名の調査団となった。

ここまでを整理しておく、現地調査に入る前に、学生たちは文献をしっかり読み込んで必要な知識の獲得に努め、現地での意見交換会に備えて各自で質問表を作成した。さらに全員が中国語を学んだ。つまり、できるだけ問題意識を鮮明にして、不十分ながらも言葉という道具をもって現地に臨む態勢を整えたのである。教員は授業を通してこのような方法の意義と必要性を学生に伝えるとともに、現地調査が実り豊かなものとなるように、地域文化学科の留学生や上級生にも協力を求めた。実際、学科には必要な人材が揃っていた。これは幸運なことだった。もちろん、調査計画も現地の方々と協議して綿密に検討し練り上げた。こうして準備万端整えて、わたしたちは台湾に向かったのである。

(2) 現地調査

最初に調査日程を示すと、下の表の通りである。

9月29日	関西空港出発,台湾桃園空港到着 台北市内の龍山寺,西門町,2・28公園,台湾総統府を見学
9月30日	午前:母語(台湾語)教育調査のため成徳小学校訪問し,3年生と4年生の授業を参観。授業後,校長室で台湾語先生2人,校長先生,台湾史研究者2人,鳥取大生13人,教員2人で台湾の母語教育に関して意見交換を行った。 午後:故宮博物院を見学
10月1日	午前:2つのグループにわかれて調査。一つは日本植民地時代と国民党統治期を生きた呉景林さんにカフェでインタビュー。もう一つは幼稚園で言語教育を参観し,台湾語の先生と校長先生を交えて意見交換。 午後:輔仁大学で日本語学科・歴史学科の学生と意見交換。
10月2日	台中へ新幹線で移動。由緒ある媽祖廟(鹿港天后宮・北港朝天宮・新港朝天宮)を調査,地元史家,台湾史研究者,廟の関係者の協力で媽祖信仰と廟に関する情報を入手。今後の研究に必要な人的ネットワークを構築。
10月3日	帰国

現地調査の詳細については次章の学生報告にゆだねるとして,教員の立場からあらかじめ2,3記しておきたい。柳教員は中国史の専門家で,研究テーマは清チベット関係である。柳原邦光教員の場合,フランス史,とくにフランス革命期の宗教関係史が専門であるから,二人とも台湾の言語問題や媽祖信仰に関しては素人である。台湾については文献でえた知識しかないのて,直接の専門家として学生を指導することはできないし,現地に行っても,大きな問いはあるにしても,具体的に何に着目してどこを調べればいいのかよくはわからない。今回の現地調査には最初から大きな限界があったといわねばならない。それだけに現地の専門家の協力が欠かせなかったのであるが,教員にとっても学生にとっても見るものすべてが新鮮で,実際に現地で自分の目で見て,身体で感じる感じがいかにも大事か,よくわかった。

また,現地の方々にはとても驚かされた。どこでも誠実に丁寧に対応していただいたし,古い媽祖廟である北港朝天宮と新港朝天宮では大変な歓迎を受けた。学生たちの報告にあるように,アピール合戦ということもあったかもしれないが,時間を割いて廟内を詳しい説明付きで案内して下さったし,質問にも丁寧に応えていただいた。また,新港朝天宮では参拝の儀礼も用意して下さった。内心,おおいに戸惑ったが,日本語で語りかけてこられる年配の方たちの熱意には感動を覚えた。廟内に満ち満ちていた熱気にはわたしたちを圧倒するものがあった。2つの廟では,船便で送らなければならないほどたくさんの文献やDVD,お土産をいただいた。そのなかには国際シンポジウムの報告書⁵もあり,研究の盛んな様子がうかがえた。

言語問題にも媽祖信仰にも,協力して下さった方々の大変な熱意と誠意を感じて,深い文化的な意味がある,そう思わざるをえなかった。この感触こそ今回の現地調査最大の成果といえるかもしれない。研究を進めていくには実感を伴う強いモチベーションが欠かせないからである。

(3) 地域文化調査発表会と報告書の作成

海外調査後のスケジュールを紹介すると,10月31日,地域学部内での中間発表,2015年1月24日,県民文化会館での一般向け地域文化調査発表会,そして4月末に報告書の提出が予定されていた。そ

れでまずは10月末の中間発表に向けた準備を始めたが、学期始めで十分な時間を確保できないことから、主に映像を中心とした海外調査報告にとどまった。1月の本発表は一般向けで行政の人や地域づくりなどに興味のある方々が来られるので、学生たちにとって最も緊張するときである。それだけに内容を深めておきたいということで、先に報告書の作成にとりかかった。報告書のエッセンスをまとめて発表会で報告する形にしようとしたのである。調査で得られた成果と新たな疑問点とを整理して、文献で調べ、授業で報告し、文章を練り上げる作業を繰り返したが、さすがに報告書の執筆は難航した。やむなく発表会用の原稿作成に切り替えて、発表会に臨んだ。発表会では、もちろん緊張はあったものの、自信をもって報告できたようである。

3月には、台湾でお世話になった呉令清先生と楊朝傑先生をお招きして、22日に媽祖信仰に関する研究会を、23日には講演会を行った。講演タイトルは、呉令清（高雄師範大学台湾歴史文化及語言研究所・助理教授）「台湾における媽祖信仰の歴史的発展過程」と、楊朝傑（台湾中央研究院台湾史研究所研究助理）「台湾媽祖廟の年中行事について—雲林県西螺街の福興宮を例として」である。呉先生は台湾における媽祖信仰の歴史的発展の概略とともに、山岳地帯に住む原住民の媽祖信仰の実態と特徴を説明された。そこには現地調査で見たのとは異なる媽祖廟の姿があった。楊先生は、雲林県西螺街の福興宮への進香（巡礼）の様子を、自らの参加体験を含めて、映像を使いながら具体的に紹介された。進香とはどういうものなのか、現代の台湾において媽祖信仰の実態はどうか、実によくわかった。お二人の研究内容はいずれも現地調査で見ることのできなかつたもので、媽祖信仰に関する教員と学生の理解は一気に深まった。

こうして文献と現地調査と両先生の講演から報告書を5月初めに完成することができた。以下は学生による研究報告であるが、報告書と同じものではない。整理して、簡潔な内容となっている。タイトルは「台湾の文化を考える—言語と媽祖信仰を通して—」である。

第2章 台湾の文化を考える—言語と媽祖信仰を通して—

はじめに

わたしたちには、鳥取や日本といった小さな地域ではなく、もっと大きな地域から文化について考えてみたい、国単位でも陸地でもなく、海という視点から人々の動きや文化のありかたを考えてみても面白いかなという思いがあった。そこで、ものごとを多角的に捉える視点を求めて、羽田正編、小島毅監修『東アジア海域に漕ぎだす1 海から見た歴史』（東京大学出版会、2013年）を読むことにした。この本はいわゆる一国史観ではなく、さまざまな地域をつなぐ海を中心において、そこから人・モノ・情報の動きを追いながら、はっきりとした境界のない、複合的で重層的な文化とその変化を把握しようと試みている。舞台は13世紀から18世紀までの東アジアである。

この文献を読むことを通して、わたしたちは国家の枠組みや陸地から見ただけでは分からない、海を移動する人々独特の、国境に囚われない捉え方や文化があることを学んだ。とりわけ目を引いたのは「媽祖信仰」であった。これは中国発祥の民間信仰であるが、東アジア世界に広くみられる現象で、今日ではとくに台湾で盛んであることがわかった。ここから台湾への関心が強まった。台湾に注目して気になったのが台湾の言語状況だった。台湾には歴史的経緯から複雑な言語状況が存在し、言語の多様性が人々の日常生活から政治にまで及ぶ重要な問題となっていた。「ここには何かある」、そう直感して、言語問題をもう一つのテーマに設定したのである。

そこで東アジアグループを「言語」と「媽祖」の2つに分けて、調査を進めることにした。現地調査は夏休みに行うことにして、それまでは核となる文献として菅野敦志『台湾の言語と文字』（勁草書房、2012年）と朱天順『媽祖と中国の民間信仰』（平河出版社、1996年）を読み進め、他の論文と合わせて、先行研究を整理しつつ何を調べるのかをできるだけはっきりさせた。

現地調査は2014年9月29日から10月3日まで台湾で行った。その主な内容は、台北の教育機関（幼稚園・小学校・大学）訪問、日本統治下で日本語教育を受けた台湾人高齢者へのインタビュー、台湾中部での媽祖廟調査である。調査はプランの作成から現地での調査まで、台湾の3名の歴史研究者に協力していただいた。現地の専門家のお力添えもあった。鳥取大学関係では、中国と台湾の留学生、中国語の堪能な留学経験者に通訳を務めていただいた。4泊5日の短期間であったにもかかわらず、充実した調査ができたのは協力して下さった方々のおかげである。

現地調査後は、調査の結果判明した疑問点を文献で調査して、考察を深めた。中間報告と地域文化調査実習発表会は、論点を整理し考えをまとめる、いい機会となった。

2つの調査について述べる前に台湾の歴史を素描する。言語問題も媽祖信仰も、17世紀から現在に至る台湾史の展開と密接な関係があるからである。基礎的な歴史理解がなければ、問題を深く理解することは難しい。

台湾の歴史記述が始まったのは、1624年にオランダ人がやってきてからである。それ以前については文字がないため詳しいことはわからない。「大航海時代」が始まって、台湾にもオランダ人がやってきて、商業的拠点の形成とキリスト教布教を目的に台湾南部に拠点を構え、原住民を統制するようになった。やがて明臣である鄭成功がオランダを排して、反清を掲げ台湾を拠点とした。鄭氏一族は22年間台湾を支配したが、1683年、清朝に屈した。

清王朝の支配は1895年まで及び、台湾史上最も長い統治となった。大陸から漢人たちが渡ってくるようになり、台湾に住んでいた原住民は次第に山岳部に追いやられていった。清王朝は平野部に暮らしていた平埔族を「熟蕃」と呼んで漢化政策をとったが、山間部に暮らしていた原住民については「生蕃」と呼んで深くは関わらなかった。そのため現在台湾に残る原住民文化は「生蕃」のものがほとんどで、平埔族のものは僅かしかみられない。

台湾は1895年の下関条約で日本の統治下に入った。日本は近代化をはかり、インフラや教育を含む様々な制度を整えたが、台湾の人々にとって植民地として苦渋を舐めた時代でもあった。1945年の日本の敗戦によって台湾は日本の統治から解放された。その後、中国大陆から共産党との覇権争いに敗れた国民党がやってきて統治した。ほどなくして台湾の人々の間から民主化への動きが現れたが、国民党はこれを弾圧し、戒厳令を発した。戒厳令は38年間にも及んだ。この間、国際情勢の変化もあって台湾情勢は複雑な動きを見せた。国民党の支配が続いたが、2001年に純台湾由来の政党である民進党が政権を獲得した。その後、国民党が政権を奪回したが、台湾は発展し続けている。

今日では、元々台湾に住んでいた「原住民」と台湾に移り住んだ「本省人」、戦後になって国民党として大陸から来た「外省人」、さらには他のさまざまな地域からやって来た人々が共存する多文化社会となっている。

以上、台湾の歴史をみてきたが、ここからいえることは、外から多様な言語や文化をもった人々が次々にやってきて支配した結果、さまざまな文化が積み重なっていることである。言葉を換えれば、台湾は絶えず外からの影響を強く受けてきたのである。それは異なる文化や言語を強制され、受け容れなければならなかった歴史である。このような苦しみを経験しつつ、原住民の文化を含めて多くの文化が混じり合い、現在の台湾が形成されているといえる。このような経験は台湾の人々にとってど

のような意味をもっているのだろうか。これがわたしたちに共通する問題意識となった。言語問題と媽祖信仰、調査対象は異なるが、2つの問いの根底にあるのはこの問題意識である。

第1節 台湾の言語状況調査

最初に、台湾における言語問題を考える。現在、台湾で主流の言語は「国語」と呼ばれているものである。しかし、それ以前から話されてきた言語が数多くある。それらを含めて大まかに分けると、次の4種類の言語群がある。①「国語」、②閩南語（中国福建由来の言語）、③客家語（中国広東北部由来の言語）、④原住民語（元々台湾に住んでいた原住民の言語で複数ある）である。「国語」とは、戦後台湾で第一言語として用いられてきた北京語で、現在大陸で使用されている北京語とほとんど変わりはなく、二つの言語の間で問題なく意思疎通を図ることができる。ただし、中国大陸で用いられる北京語と様々な方言は「中国語」と総称して「国語」とは区別されている。本稿では②③④をまとめて「台湾語」と表記する。「国語」と比べると、「台湾語」はマイノリティな言語だということができる。

(1) 台湾の言語史

このような言語状況はどのようにして生まれたのだろうか。以下では、言語の観点から次の5つの時期に分けて、台湾の言語形成史を概観しつつこの問題を考える。オランダ統治時代、清朝時代、日本統治時代、国民党時代、現在の台湾、である。

最初にオランダ統治時代（1624～1661年）である。これより以前は、海を越える大きな交流はほとんどなく、原住民は狩猟採集をしながらそれぞれ独自の言語を用いて生活を営んでいた。大陸から渡ってくる漢人もいたが、少数で一在在者の立場に留まっていた。ところが、15世紀後半から「大航海時代」が始まり、ポルトガル、スペイン、オランダがアジアに進出した。台湾史に深く関わったのは特にオランダである。オランダのアジア進出の主たる目的は、交易とキリスト教布教である。1624年にオランダ東インド会社が原住民を管理下に置いたが、オランダ語の使用を強要することはなかった。キリスト教を布教するために原住民語を研究して、ローマ字で表記したのである。

次に清朝時代（1684～1895年）の言語状況はどうだったのだろうか。台湾の原住民は、平地で暮らす平埔族と山岳地帯で暮らす高砂族に大別される。清朝は漢化政策をとり、それを受容する原住民を「熟番」、従わない原住民を「生番」と呼んで区別した。熟番は漢語による教化を受け、漢人の文化に溶け込んでいった。そのため、清朝時代末期になると、ほとんどの平埔族は漢族化し、習俗と言語を失った。漢族とはといえば、清朝が海禁政策を強化したにもかかわらず、大陸から閩南系や客家系の人々が移住し、閩南語と客家語がそれぞれのコミュニティで使用された。

日本統治時代（1895～1945年）について。1894年、清は日本に敗北し、1895年の下関条約で台湾を日本に譲渡した。このため新たな言語状況が生まれた。日本総督府は、住民に日本語の使用を強制し、「蕃童教育所」（4年制）で日本語教育を始めた。学校教育では、台湾の人々は「公学校」で日本語授業を受けた。地域差もあるが、現在でも高齢の台湾人で日本語を流暢に話すことができる人は少なくない。こうして日本への同化が進み、母語が不確かなものになっていく。清朝時代に始まった平埔族の言語消失にさらに拍車がかかり、もはや修復不可能な段階までなってしまったが、こうした政策は高砂族までには及ばなかったようである。太平洋戦争が始まって戦争が拡大すると、「皇民化」政策が始まり、台湾語の私的使用さえ許されなくなる。こうして原住民語のみならず閩南語、客家語といった台湾諸語の消失が加速化することになった。

続いて国民党の時代(1945~2001年)となる。日本統治時代に多くの在住者が日本語を話せるようになっていたが、1945年、敗戦によって日本は台湾から完全に退去した。中国大陸の国共内戦で蒋介石率いる国民党は敗色が濃厚になると台湾に入るようになり、1949年の敗北後、台湾は完全に国民党の支配を受けることとなった。台湾の人々は日本語を強制されなくなったが、国民党の言語政策によって再び苦境に陥る。国民党は台湾の脱植民地化を掲げ、日本語を排除して国語を普及させようとした。しかし、言語的混乱が続くなかでの強引な普及政策は民衆の不满を募らせ、1947年の2・28事件の際には国民党に対する反乱心理の一因となった。このような情勢不安から1949年に戒厳令が敷かれ、国民党の独裁が一層強化された。戒厳令は1986年まで続いた。公の場での台湾語の使用禁止や繁体字の使用など、台湾語の復帰はならなかった。

しかしながら、1986年に民進党が発足し、戒厳令が解除されて、台湾出身の李登輝が総統に就任するなど、台湾は自立の姿勢を見せるようになる。このとき、台湾語の地位を向上させる必要があるということで、学校教育への取り込みが議論されるようになる。とりわけ民進党で活発になり、2001年、国民党から民進党へ政権が交代するとともに、学校での台湾語教育が義務づけられた。

最後に現在の台湾(2001年以降)である。台湾語の義務教育は「郷土言語科目」という位置づけで始まり、こどもたちは閩南語、客家語、原住民語のいずれかを選択し、小学1年から毎週1限授業を受けることになった。中学校では選択科目としての履修である。科目名については、2011年に教育課程が見直された際、「本土言語」と改められて今日に至っている。

(2) 現在の問題点

ここからは郷土言語政策を含めて「本土言語政策」と総称して、それがどのような意図で始まったのか、さらにどのような問題点があるのか、整理する。本土言語政策の狙いについて、1994年に公布された「国民小学郷土教学活動課程標準」には次のように記されている。①郷土の歴史、地理、自然、言語、芸術などの認識を深め、ならびに保存、伝達、作新の観念を養う。②観賞能力を高めることをもって郷土における活動の興味を高め、愛国心を高める。③郷土の問題を積極的に観察、探究、思考し、問題を解決する能力を養う。④各族群文化に対する尊重心を養い、開かれた態度と視野をもって社会的調和を増進させる。以上から、教育の主眼は、言語習得それ自体にあるというよりも、言語を通じて台湾文化を深く理解し、社会的調和を達成することにあつたと思われる。事実、台湾教育部は、「郷土言語」とは「母語」と同一ではなく、台湾で用いられてきた地方言語、原住民言語であり、その習得には「言語能力」もさることながら「文化」伝承の意義も込められるべきだ、としている。このようにして本土言語教育は始まったのだ。

このような意図で始まった本土言語教育は、今、どのような状況にあるのだろうか。研究書によれば、いくつか疑問が提示されている。例えば、小中の9年間、台湾語を学習したとしても、1週間に1限分の授業で実際に台湾語を話せるようになるのか。また台湾語それ自体の需要についても地域や年代で大きな違いがあり、時間をかけて学ぶ必要があるのか、という疑問である。このような問題を抱えつつ台湾語教育は14年目を迎えている。

(3) 現地調査の報告

ここでは台湾での現地調査について報告する。わたしたちの問いは、本土言語政策の成果はどうか、台湾人は「本土言語」をどのように認識しているのか、である。というのも、日本語文献では、台湾は多文化主義を掲げて、既存の文化を認めるという姿勢で本土言語政策を始めたが、成果ははっ

きりせず、実情がわからない、とされているからである。また、大陸とは異なる独自の道を歩んでいる台湾人の意識が本土言語政策から何らかの影響を受けているのかも気になるところである。現地調査では、以下4つのパートで調査を行った。幼稚園と小学校での台湾語授業の見学、教育現場の方々との意見交換会、日本統治時代に日本語教育を受けた方へのインタビュー、台湾人大学生との意見交換会である。

幼稚園・小学校での台湾語授業の見学から紹介しよう。わたしたちは9月30日に台北市成徳小学校で、10月1日には台北市興隆附属幼稚園で台湾語の授業を見せていただいた。以下では、幼稚園、小学校の順で説明する。

興隆附属幼稚園では、4～6歳の台湾語授業を2コマ見学し、担当教員や園長さんと1時間ほど意見交換会を行った。授業の様子を紹介すると、「園児は台湾語について何も知らないし話せない」という前提で授業が行われている。ここで教えられている台湾語は閩南語であるが、先生（非常勤講師）は説明を国語でしていた。先生が園児に話しかけ反応を待つ形で授業が進んだ。唱歌やダンスもあり、お遊戯のようでもあった。身体感覚で楽しく閩南語を覚えようということであろう。



授業後、教室での意見交換会で尋ねたところ、この幼稚園ではもっと年少のクラスでも授業をしているが、台湾語授業を行う幼稚園はまだまだ少ないということであった。幼稚園で台湾語のカリキュラムが組まれたのは10年前からで、興隆附属幼稚園では8年前から授業を行っている。問題は閩南語だけしか学べないことであるが、閩南語を優先するという考えではなく、課外で他の言語に触れるイベントもあるという。小さな子に台湾語の授業をする意義について聞いたところ、「文化を引き継ぐための教育」という回答である。文化の伝承に言語は重要だ。言語を学んで文化を引き継ぐ方法を次の世代に残したい。それには小さい頃から台湾語を学習することが大切だ、ということである。わたしたちは、子どもたちに言語と文化を伝承することに大人たちが真剣に取り組んでいるという印象を強くもった。

次に台北市の成徳小学校では、最初に3年生、次いで4年生の閩南語授業を見学した。3年生の授業では、「台湾語をある程度知っている」ことを前提に発音を重視しており、先生（非常勤）はほとんど国語で話し、覚えてほしいところだけ台湾語で話していた。教科書を中心に授業が進められたが、その内容は中華圏の文化に関するもので、中秋節や伝統の品々などの話である。また、視聴覚教材を使って子どもたちは発音したり歌ったりしていた。印象的だったのは、子どもたちのほとんどが活き活きしていたことで、楽しむことを優先した授業構成だった。

4年生の授業では、文法が重視されていて、言語表記法や注音について丁寧に説明されていた。教科書と黒板のみでの授業であったが、3年生よりもレベルがかなり上がった印象を受けた。言語も台湾語がメインで、分かりにくいところだけ国語が使用された。とはいえ、子どもたちは発音のときや発表以外ではほとんど発言しなかった。台湾語を聞き取る程度には習得しているが、自分から発言するほどには至っていないということだった。

教室の中にはところどころに空席があった。不思議に思い、先生に尋ねたところ、他の台湾語の授業に参加している子どもの席ということだった。

3年生と4年生の授業を比べてみると、3年生は楽しみながら授業を受けていたが、4年生の授業では真剣な空気が流れており、先生のいうことを一生懸命聴こうとしていた。どちらの授業でも子どもたちはしっかりと参加し、雰囲気もよかった。子どもたちに物怖じする様子はなかった。

閩南語授業を見学した後、2名の閩南語の先生と校長先生とを交えて意見交換会を行った。用意してきた質問をいくつかして、4つの回答を得た。まずは2001年からの台湾語教育がどのような成果をあげているのか聞いてみた。先生方は「子どもたちに着実に台湾語が浸透していると感じています」と自信を示され、近所の人達と台湾語で話したり、若者同士で話すこともあると具体例を紹介された。

2つ目は台湾語教師の養成についてである。戦後、台湾語の公的使用が禁止され、話者も激減したとされているので、台湾語を教えることのできる教師が足りないのではないかと想像していたが、「現在、台湾語教師の育成に自分たちも積極的に関わっており、教師の数は徐々に増えています」と先生方は自信をもっておられた。また台湾語の実力技能試験もあって、受験者数が年々増加しているとのことである。

3つ目は、台湾語教育の意義について少し込み入った質問をした。わたしたちが注目したのは台湾語を母語にもたない児童たちである。というものの、近年、台湾では様々な言語や文化をもつ人々が増えているからである。なかには、「新台湾の子」と呼ばれる東南アジアからきた子どもや非中国語圏出身者で台湾語を母語としない児童が少なくない。そうした子どもたちにまで台湾語を教育する意義はどこにあるのか、という疑問をぶつけてみたのである。先生方は次のように回答された。「今日の台湾らしさには様々なものが混ざり合っています。台湾語を母語としない子どもたちが台湾語を学ぶ。そうすることで台湾の多文化性をよく理解し、守って行ってほしいのです。」言葉は文化そのものであり、文化を理解するために欠かすことのできないものでもある。これから台湾人として生きていく子どもたちは、台湾語を学ぶことを通して台湾にしっかりと根を張ることができるであろう。

4つ目は、何を台湾語とみるかである。冒頭で「台湾語」は台湾に存在する様々な言語を総称したものであると紹介したが、想定されていたのは閩南語と客家語、その他の原住民語である。実際、これらが本土言語政策の中核である。しかし、「台湾語」以外の母語をもつ子どもたちもいる。彼らの母語はどのような位置づけられているのか、学校で教えられるべき台湾語には含まれないのか、それが気になっていた。先生方の回答は「混じり合う台湾として、台湾人である限り、今まで台湾になかった言語でも台湾語の範疇に属します」である。実際、一部の学校では上記の子どもたちのために長期休暇を利用して母語授業などを行っているという。これは想定外の回答だった。3つ目と4つ目の質問への回答を通して明確になったことは、台湾では言語と文化の多様性とその意義を積極的に肯定評価しているということである。

今度は日本統治時代に教育を受けた方へのインタビューである。台北市内のカフェで呉景森さんにインタビューを行った。呉さんは1933年に彰化県に生まれ、日本語による初等教育を受けた。光復以後2年間は閩南語を使ったが、その後、国民党政権の命令で国語を学ぶことを強制され使ってきたという。各言語のレベルについては、日本語は問題なく聞き取りができる。話すこともかなりできる。閩南語は、会話はあまりできないが、聞き取りは可能である。国語はまったく問題がないそうである。

経歴をうかがうと、商業高校を卒業後、22歳で地元銀行に入行。主に土地売買に関わる仕事をして60歳の定年まで勤め上げた。仕事では国語を使わなければならなかったが、実際には日本語を多く使用していた。台湾語や日本語は公での使用が禁止されていたが、それでも使ったのである。国語に関しては、自宅にいるときでも学習を継続したという。

お話を伺って、言語教育や社会のあり方がこれほどまでに影響を与えるものなのかと驚いた。また、統治者の交代に伴って使用する言葉を変えなければならず、しかも大人になってから新たな言語を習得しなければならなかったとは、なんと苦難多き人生だったことだろうか。しかも呉さんだけではない。数多くの台湾人が同様の経験をしなければならなかったのだ。

新たな疑問もわいてきた。呉さんには政府への反感はなかったのだろうか。言葉を変えることを幾度も余儀なくされたことは、台湾人としての意識を保ち続けることを難しくしたのではなかったろうか。ところが、呉さんは「新しい言葉を覚えることは大変でしたが、わたしはただ上からの方針に従っていただけです」と実に淡々と話された。自身が何者であるかなど気にする風はない。そこには時代を懸命に生きてきた人の穏やかな強さがあった。

最後に紹介するのは、台湾最大のカトリック系大学である輔仁大学の学生たちとの意見交換会である。若者は台湾語についてどんな教育を受けてきたのか、普段は国語という生活で台湾語学習をどのようにみているのかなど聞いてみた。わかったことは、彼らは本土言語政策の転換点に位置していることだ。この政策が施行されたとき、ちょうど小学校を卒業する前後で、台湾語授業を受けていないか、受けた経験のある学生でも1年間程度でしかない。家族に台湾語の話者がいたので台湾語を少し使えるという学生が何人かいたが、この年齢層は本土言語政策とほぼ無縁の世代なのだ。

学生たちのなかに「外省人」が3人いた。当然台湾語を話せない。しかし、そのうちの1人は自分の言語は台湾語ではないが、それでも台湾語で高齢者の方とコミュニケーションを図りたいと語った。他の学生も同意しているようで、自分のルーツを大事にしつつ、台湾は自分たちの生きる場所であり、生活文化をもっとよく知りたいという思いがあるようだった。

(4) 現地調査からわかったこと

以上が現地調査の様子である。調査を通してわかったこと、実感できたことが2つある。1つは、小学校卒業後、子どもたちの多くが生活レベルで台湾語を使えるようになってきていることである。台湾語の先生方は2001年の台湾語教育開始から今日まで指導してこられて、成果を実感されている。先生方の個人的な意見にすぎないとみることでもできるだろうが、現場の声として貴重ではないだろうか。

もう1つは、さまざまな言語や文化をもって台湾に暮らしている人々を台湾がどのように受け止めているかということである。「新台湾の子」に対する母語教育支援にみられるように、多言語・多文化への高い受容力は台湾の新たな可能性を示しているのではないだろうか。台湾に住むかぎり、



どの国から来た人であっても母語が尊重されるとすれば、出自を問わない台湾人としての意識も身に付いていくかもしれないと思うからである。

最後に、調査を通じて一番驚いたことは、人々のたくましさ、力強さだった。幾度となく苦境に立たされ辛酸をなめてきた台湾の人々は、今では多様性を受け容れ、それを強みにしているようにわたしたちには感じられた。言語の消失、変化、再出発は楽な道ではなかっただろうが、その辛さ、痛みこそが、それぞれがもっているものを大切に生きていこうという気持ちを生んだのではないだろうか。

第2節 台湾における媽祖信仰

わたしたちは文献で媽祖信仰の強さを知った。媽祖信仰とは華人文化圏の民間信仰であり、今日でも多くの人に信仰されている。詳しくは後述するが、媽祖は航海の神で、古くから人々の航海の安全祈願の対象になってきた。今日では航海技術が発達し、航海に伴う危険は小さくなったが、それにも関わらず媽祖信仰は衰えるどころか広まりを見せ、生活に浸透しているようである。それはなぜなのか。この問いにこたえるために、わたしたちは媽祖信仰が最も盛んな地域の一つである台湾で現地調査を行った。以下はその報告である。

(1) 媽祖とは

媽祖は中国民間と世界各地の華人社会で信仰されている女神である。媽祖については大別して2つの解釈がある。自然の力を水神として祀ったとする自然神説と媽祖を実在の人物とする人神説である。有力なのは後者で、中国福建省の湄洲島に実在した特別な霊力をもつ娘が多くのの人々を水難から救って、死後、航海の神として祀られるようになったというのである。



媽祖信仰が始まった時期については、正確なことはわからない。媽祖は南宋時代に初めて史料に現れるが、そこには生没年月日などの記述はない。明代になると、誕生日を3月23日とするような詳細な記述が現れる。史料分析の結果、おおよそ宋代に信仰が始まって、明代に媽祖の生誕祭が行われるようになるなど、この頃浸透したと考えられている。本節では、最初に、人神説にたつて媽祖信仰の起源と社会的背景について述べる。後に媽祖となる女性はどのような人物だったのか、なぜ神として信仰されたのか、どのような社会的要因が媽祖の神格を決定し、発展と変化を促したのか、考える。

媽祖とされる女性については、出生地と身分について論争がある。媽祖は今日の福建省の湄洲島出身か、それとも賢良港出身なのか、漁村の巫女だったのか、官僚家庭の令嬢だったのか、である。なぜこのような論争が生じたのかという、最初に論争になったのは身分である。これには、元代以降、封建的伝統思想が上層階級と民衆に広まっていたことが関係している。ここでいう封建的伝統思想とは、宗族が本族の族譜を作成する際、歴史上の著名人や名将、あるいは伝説上の人物、神仙などを系譜に織り込んで、それを本族の栄光として血統上の高貴さを示す習慣があったことである。また、信仰者の尊崇と畏敬を高めるために、神明の出身と血統関係を高貴なものとしたことである。この結果、媽祖は官僚の林家出身であるという「林家の娘」説が生まれたのである。

一方、出生地論争が起きるようになったのは近年のことで、中国政府の開放政策が関係している。媽祖の霊力が高いということで、台湾の媽祖信仰者や海外の観光客が大勢湄洲島にやってきて、たくさんのお金が集まるようになったために、「進香客」（巡礼者）を求めて賢良港との間に出生地論争が起きたのである⁶。

信仰の内容と社会的背景については、次のように考えられている。媽祖の有力な出生地とされているのは湄洲島であるが、島の漁民たちは、「林家の娘」の生まれながらの霊力を信じ、予知能力に頼るところが多かった。湄洲島はその当時多災多難で、天気や潮の流れを予測する能力、吉凶を予知する力を必要としていた。また、社会に功績のあった人物が、死後、神として祀られるという伝統的習慣があって、生前霊力を発揮した「林家の娘」も、死後、偉大な航海神として祀られるようになった、ということである。

媽祖は時代の実情や需要に合致していたからこそ信仰されたと考えるべきだが、この点をもう少し説明しておこう。媽祖は海を支配する権威をもっていたが、同時に保護神でもあって、この二つの神性が湄洲島民の生活上の問題を解決するのに適切なものだった。問題とは漁業の危険性と天気に左右される農業の不安定さである。危険な海上作業の安全を願う気持ち、農作物に害を及ぼし生活を危うくする自然災害を免れたいという切実な思いが、媽祖の神性を生み出したのだらう。媽祖が海難にあった人々や船を救った伝説、媽祖の霊験で重病患者が治癒したとされることなど、島民の間で生まれた多くの霊験譚は媽祖への信仰を深め祭祀を盛んにして、島外に伝播することとなったのである。

(2) 媽祖信仰の伝播

それでは、中国の一地方信仰にすぎなかった媽祖信仰はなぜ広範囲に広まって、様々な社会層にまで浸透することができたのだろうか。媽祖信仰が初めて島外に伝わったのは、「林家の娘」が神として島民に祀られてから 100 年ばかり後のことである。最初に伝わったのは対岸にある莆田県の寧海である。商業と漁業の盛んな港町である寧海は、湄洲島と同じような信仰をもちやすい場所で、媽祖の神性は海路の不安を和らげてくれると理解されていた。媽祖信仰が寧海に伝わったことは、小さい海島の保護神である媽祖が、中国東南の沿海各地の保護神に転化する重要な第一歩となった。そして海商や船乗りを含む多数の人々の移住にともなって、莆田や仙遊に、さらには泉州や省外に伝わったのである。

媽祖信仰の拡大には朝廷と官吏も大きく寄与している。その背景には、杭州臨安への遷都にともない、東海沿海の治安と海上運輸の重要性が高まったことがある。媽祖は福建省の士大夫たちの運動によって同地の有力な神のひとつになるが、中国南部の港市の海商や船員たちの間でもその霊験が話題になり祀られて、朝廷から注目されるようになった。国家との関わりは、1124 年に高麗遣使船の遭難を救った功で皇帝より廟額を授かったことに始まるが、海上騒乱を鎮圧する際にも、媽祖の助力があるとの喧伝は、味方の士気を高め、敵を怯えさせた。このような要因が朝廷と官吏をして媽祖信仰の拡大に貢献させたのである。

この時代、数多くの航海諸神が霊威を競っていたが、媽祖信仰はそれらの神々と融合しつつ広まっていった。媽祖は約 300 年間の伝播過程を経て、宋代末には山東半島以南の中国沿海地方の海上保安神となったのである。

元朝時代以降、国家との関わりはさらに深まっていく。元朝時代、観音の化身とされるようになった媽祖は、国家航海神として安全祈願の対象となる。北の大都（北京）を首都とした元朝は、海路を

使って江南の穀倉地帯から糧米を都に安定供給する必要があったのである。明代になると、海禁政策が採られ、宣諭使が貿易を含めて対外交流を独占的に行なうようになる。このとき媽祖は宣諭使の海上守護神とされ、廟が新設されて、遠征の度に祭礼がおこなわれたのである。

媽祖信仰と国家との関わりがもっとも深まり、神格が高くなったのは清朝の時代である。清朝は、1680年、莆田沖の海戦で当時台湾を支配していた鄭氏を攻略した際、湄洲島に勅使を遣わし改めて「天妃」という名を授け、祀った。その後、征討の成功に天妃の加護ありとして、康熙帝は「天后」を授けた。清朝は反乱や対外戦争の度に媽祖を軍神として崇敬し、国家への忠義の象徴として全国の都市や鎮に祀らせたのである。上の図は清の乾隆帝が鹿港新祖宮に与えた扁額である。



次に中国以外への媽祖信仰の伝播をみてみよう。明と朝貢関係をもった多くの国には中国人が移住し、貿易や外交を行った。このような人々が媽祖信仰を伝えたのである。例を挙げれば、多くの華僑が移り住んだマラッカやホイアンなど東南アジアの諸港市に廟が見られる(その起源は17世紀までしか遡ることはできないが)。琉球王国には、中国人移住地である久米村に15世紀前半から2つの廟があって、人々は媽祖を「菩薩(ブサ)」と呼んで航海の安全を祈願した。鹿児島島の船津近くにも廟があり、「菩薩堂」と呼ばれていた。その他、来航地や唐人町のあった地域では舟用の小媽祖像が残っている。朝鮮では中国人の移住に伴う媽祖信仰の流入は確認されていないが、使節や船員たちの間では知識や信仰があったようである。

(3) 台湾の媽祖信仰

次に台湾に媽祖信仰が伝わった歴史的経緯と現在の媽祖信仰について文献から確認しておこう。福建省では山が多く平野も狭いため耕地が不足し、明代の中期までに人口は飽和状態に達していた。当時、海禁政策が採られていたが、福建省とその周辺に住んでいた人々は南洋方面や台湾へ進出していった。台湾への移民が本格化するのには、鄭成功がオランダ人を駆逐し全島の制圧に成功してからである。清朝は遷界令(沿海に住む者を内地へと移動させ、貿易・耕種をさせないようにした)を出したが、禁を犯し海外に進出するものが少なくなかった。遷界令が解かれても、台湾への移民は厳しく統制されていたため、台湾に渡るには政府の禁令を犯さなければならなかったが、何より台湾海峡の波風と戦わなければならなかった。

そのような人々が航海の安全を保護する媽祖にすがったのは、自然なことである。出発に先立って廟に出向き、媽祖の神像の分霊を受けた。無事に台湾に到着すると、神霊の庇護に感謝してこれを祀り、生活が安定すると廟を建てた。また媽祖を祀っていた舟が海で遭難し、神像が台湾に漂着して地方住民によって祀られるようになったケースもある。

清朝時代に媽祖信仰は大いに広まるが、日本統治下の1937~1945年にかけて、他の民間信仰と同様に、台湾総督府の皇民化運動によって大打撃を受けた。中国系の神は廃止され、日本の神を祀ることを強制された。各地の廟や寺院も取り壊された。

戦後、媽祖廟の数は急増している。特に、1960 年以後、経済の飛躍期に急速に数をまして現在に至っている。その背景には、次の事情があると考えられている。社会構造が農業社会から工業社会に急速に転換するなかで、都市が興起し農村の郷村社会は打撃を受けた。社会構造は短期間で不安定な状態になり、個人においても困惑、挫折などを経験した。そこで伝統的な神霊にすがったのではないか、というのである。

さらに、媽祖廟の発展の要因として、地方派閥の活動や、政府の高官・地方長官・議員たちが個人的信望を高めるために廟を利用していることなどが挙げられている。もっとも、媽祖廟側もそれを利用して知名度を高め、信者の増加、進香客（参拝客）と遊覧者の引き寄せを図っている。また、近年、台湾の廟が企業の運営に入って、廟と神明の地位が靈験を左右し参拝者数と収益に影響すると理解されて、論争が生じてきたともいわれている。いずれにしても廟同士の間での宣伝合戦には激しいものがある。

台湾の人々の神に対する考え方が宣伝合戦を助長している。一般に家で祀る神は廟のそれより靈験が低いとされているため、重要な祈願の場合には廟に参拝しなければならない。さらに、同じ明神であっても、祖廟の媽祖は分身・分霊の媽祖よりも靈性が高く、古い媽祖の方が新しいものよりも靈性が高いとされている。このような見方があるため、媽祖廟間でしばしば「開基」「正統」などの争いが起こるのである。

(4) 現地調査

現地調査は4泊5日で、対象を台湾の北部と中部に絞って行った。最初に台北にある輔仁大学では学生たちにインタビューを行い、指導教員の李啓彰先生にもお話を伺った。媽祖廟の調査では、台湾国立高雄師範大学助教授で台湾史を専門にしておられる呉玲青さん、台湾史研究所研究助理の楊朝傑さん、台湾史研究者の周東怡さんに同行していただいた。また、地元の専門家の方にも詳しくお話ししていただいた。媽祖廟関係者のみなさんはわたしたちを歓迎し、質問に丁寧に答えてくださった。こうした方々のご尽力のおかげで、わたしたちだけでは決して見ることでできないものまで調査することができた。

まず、台北の輔仁大学を訪ねて、日本語学科の学生たちに媽祖信仰についてきいてみた。学生たちは媽祖について関心も知識もなく、観光や受験のために廟を訪ねる程度だということだった。ひどくがっかりしてしまったが、李先生によれば、媽祖信仰には世代間の違いも地域差もある、台北はあまり強くないということだった。気を取り直して、台中に期待して4つの廟を調査した。

最初に向かったのは鹿港という歴史ある港町で、古い媽祖廟が2つある。1つはかつて官僚たちが参拝した新祖宮（洛津里）で、もう1つは庶民が参拝した天后宮（鹿港鎮中山路）である。新祖宮は整然とした小綺麗な廟で、中国皇帝の見事な扁額が何枚も掲げられていた。天后宮は庶民が利用してきた廟というだけあって、扁額もあったが、雑然とした感じがした。今でもよく親しまれて、新祖宮より参拝者が多いということである。鹿港は古い建物と家並みがよく残って、独特な雰囲気



醸し出していた。狭い通りを歩きながら店先や民家のなかに媽祖が祀られているのを窓越しに見ることができた。様々な神仏と一緒に祀られていて、媽祖はその中央に置かれていた(前頁の図を参照)。神棚と仏壇が1つになったようなものである。これが日常なのであろう。庶民の暮らしのなかで媽祖は当たり前のように存在していた。

北港鎮の中山路にある北港朝天宮は参拝者が最も多い媽祖廟で、台湾の媽祖信仰の中心的存在である。実際、廟はとても広くて立派なだけでなく、古さが感じられた。存在感は圧倒的だった。詳しい説明をしていただきながら廟を見て回った後、大きな会議室に迎えられて、関係者のみなさんと意見交換した(右図)。このとき、呉本信一さんから媽祖信仰への思いとそれがもつ意味、近年、媽祖信仰の起源をめぐって生じている問題、さらには今後の調査に向けての情報など、貴重なお話を伺うことができた。お別れするときには、媽祖信仰に関する国際シンポジウム関係の文献のほか、CD や媽祖グッズなどのお土産品をいただいた。媽祖を深く理解してほしいという強い願いを感じた。

嘉義県西北部の新港郷大興村新民路にある新港朝天宮は、「開台媽祖」と称して台湾最古の媽祖廟だと主張している。驚いたことに、ここでも熱烈な歓迎を受けた。わたしたちのためにわざわざ礼拝を用意してくださったのである。まったく思いがけないことで、とまどってしまったが、貴重な体験になった。ご老人が日本語で話しかけてこられたが、その熱意には圧倒されてしまった。普段は閩南語を使っておられるそうで、「国語」は話せないということだった。

ここでも廟に関する文献や記念品、お土産などをたくさんいただいた。「新港飴」は懐かしい味でとてもおいしかった。

これから北港朝天宮で呉本信一さんに伺ったお話のなかで最も重要だと思われる点を紹介したい。「航海技術が発達した今でも、なぜ媽祖は信仰され続けるのでしょうか」、「なぜ、こんなにも熱狂的に信仰されているのですか」という質問に対して、「社会が変わっても、人間の根本的な性質は変わりません。人々の豊かになりたいという気持ちから媽祖は信仰され続けているのです」と答えてくださっ



た。この言葉をわたしたちは次のように理解した。時代が変わっても、安心して豊かな生活を営みたいという気持ちは変わらない。それを実現するために自分の力を超えた何かにすがりたいとき、祖先の生活に寄り添いながら存在してきた媽祖に手を合わせるのではないか、ということだ。

今回調査した廟全体についていえることは、まずは民間信仰とは思えないほどの建築と装飾の絢爛豪華さである。日本の神社仏閣に比べると実に色彩豊かで、屋根の上には龍や動植物の極彩色の彫り物の飾りがあった。次に興味深いことに、建物入口の扉に描かれた絵にも祭壇にも媽祖を中心にして複数の神々が混在していた。媽祖像自体も祭壇に幾体も安置されていたし、ほかの建物にも夥しいほどの小さな像が並べられていた（前頁の上の図）。それぞれ霊力をもつものとして他の廟への貸し出し用だということであったが、日本では決して見ることのできない光景である。

北港朝天宮と新港奉天宮との間のアピール合戦の凄まじさは、文献を読んで知ってはいたが想像を超えていた。台北の輔仁大学で学生たちにインタビューをしたときは、媽祖に対する関心の低さを目の当たりにして、文献との落差にすっかり落胆して、これで媽祖信仰調査も終わりかと嘆いたが、台中で廟や周辺の人々の媽祖に対する熱い思いに触れて、媽祖が台湾文化において重要な位置を占めていることを実感できた。

地域差については、台北ではあまり信仰が盛んではなく、南に行くほど篤いという印象を受けた。わたしたちが訪れた台中の媽祖廟付近では、ほとんどの店先で媽祖像が見られた。町の雰囲気も台北の都市的な感じとは違い、昔ながらの街並みが残っていた。町全体が廟の存在を感じさせた。文献によると、主要な媽祖廟の多くは台中から台南にかけて分布している。台中・台南は大陸からの移住者が最初に定住したところで、故郷の媽祖信仰を広めた。また、この地域には漁村や港が多く、媽祖信仰が根つき易かったようだ。台北は日本統治時代に入ってから皇民化運動の一環として開発されたため、それまで人の入りも少なく、媽祖信仰の広まりも遅かったと考えられる。

(5) まとめ

古くから信仰されてきた媽祖は現代の台湾でも信仰されている。地域としては中部以南で特に盛んである。今日では、航海技術や気象予報が発達し、航海に伴う危険も少なくなっているのだから、媽祖への信仰心は薄れるはずである。それにもかかわらず媽祖が信仰されているということは、現代の台湾人にとって航海の観点からだけでは説明できない何かがあるということである。それが何なのか、これが当初からのわたしたちの素朴な問いである。

文献調査と現地調査から考察した結果、媽祖信仰と政治・経済・文化などとの複雑な関係が見えてきた。現代の台湾では、大きな廟同士の間で進香客集めを競っている。媽祖信仰の発祥の地である湄洲島の媽祖と関係が深い廟や歴史の古い廟の方が霊力において勝ると考えられているので、どちらが古いかを激しくアピールするのである。このような廟同士の競争や経営的戦略が廟と進香客の媽祖への思いや信仰を熱くしているのだろうか。また、地元政治家が自分の権力を高めるために民衆に人気のある媽祖を利用していることも影響しているかもしれない。

文化的にみれば、現地調査後に文献を読んでわかったことだが、福建から移住者たちが持ち込んだ「五縁」の文化が媽祖信仰の浸透に一役かっていると思われる。「五縁」とは、血縁・地縁・業縁・神縁・物縁で、華人は移住先に五縁の文化を持ち込んで宗族の結びつきを保ってきた。樋泉克夫氏は、「『五縁』はそれを共有する集団の相互扶助の紐帯」で、漢民族は「移動元の生活文化を維持しようとする」と述べている。注目したのは「神縁」である。移住者たちにとって神縁はどのような意味をもっているのだろうか。樋泉氏は次のように解釈している。「土俗信仰、いいかえるなら祖籍神の信仰を同じ

くすることで故郷（方言）を同じくする人々の団結の象徴となり、移住者集団の結びつきを強め、移動先での種々の困難に対応できる。台湾の農村部に顕著にみられるように、この団結が後に集落、村落へと発展していくことになる。」以上から、媽祖が台湾を含めて広い地域に伝播した理由の一つとして神縁を挙げることができるだろう。媽祖信仰は神縁として集団への帰属意識を生み、存在確認を可能にしたのではないか。現代の台湾においても、ある種の共同体のなかにいるという意識を育んでいると考えられないだろうか。

また、呉本さんが述べられたように、安心して無事に生きたい、豊かな生活を営みたいという気持ちは、いつの時代でも変わることのない願いであろう。その願いを実現するために自分の力を超えた何かにすがりたいと思うとき、先祖と同様に自ずと媽祖に向かうのではないだろうか。現代の台湾人にとって媽祖を信仰することは、生活の豊かさを願う気持ちの現れであり、そのような気持ちを共有する共同体のなかに自分が存在するを感じさせるものではないだろうか。

今回調査できたのは台湾北部のごく一部と中部である。媽祖信仰が盛んであるとされる南部は手付かずのままである。今後の課題としては、調査対象を南部に広げて、媽祖信仰のありようを比較したい。また、呉先生によれば、台湾に渡った漢人が多く住む沿岸部の地域と原住民の多い山間部の地域では媽祖信仰のありようが若干異なっているようなので、詳しく調査すれば、台湾の文化を考える上で重要な示唆がえられるかもしれない。さらに、台湾の媽祖信仰を中国大陸など広域的な地域の中に位置づけて検討することが、いうまでもないことだが、必要である。

おわりに

最後に、東アジアグループが台湾調査を通して何を学び取ることができたかについて記しておきたい。台湾の言語状況と媽祖信仰に取り組もうと思った動機をふりかえると、『東アジア海域に漕ぎ出す 1 海から見た歴史』で媽祖信仰の存在を知り、引き付けられた。台湾の言語状況にも関心を抱いた。「ここには何かある」と直感して研究を進めてきたのだ。この「何か」とはなんだったのだろうか。1年間の調査を行った今、おぼろげながらその輪郭が見えてきたように思う。

それは言語も媽祖信仰も「人々の暮らし」に根本的なところで関わっているということである。言語については、言葉は集団の中で生きていくうえで欠かすことのできないものであり、文化の理解や伝承を担ってきた。台湾では外来政権による統治が長く続いて、人々は生き方や文化のあり方を幾度となく変更せざるをえなかった。言語はそれらを表象していたといえよう。言語はまた近代国民国家形成の中核の一つであり、政治的に中国のみならず諸外国と複雑な関係を今なお有する台湾の自立を考えると、台湾の将来に関わる問題であろう。媽祖信仰については、困難な時代において、人々が平穏無事に、幸せに生きていきたいという願いと結びついている。いまでは、台湾を特徴づける文化として、台湾らしさを表象するものとして、台湾人の精神のなかに根づいているように思われる。台湾の言語状況も媽祖信仰も人が生きるうえで大切なものと深いところでつながっている。もちろん、波乱に富んだ台湾の言語状況の外からやって来た人もいれば、媽祖を信仰していない人もいるだろう。しかし、「多様性の受容」という今日の台湾のありかたを考えると、言語や媽祖信仰は「台湾人」として台湾に住む人々をつなぐ共通意識の醸成と保持に関わるものだといえるのではないだろうか。

これまでの台湾史を振り返ると実に波乱に富んだ苦難の歴史であるが、現在では、様々な文化が激しく衝突することなく共存しようとしているようである。苦しみを乗り越えて、自文化を大切にすること、他文化を受け入れること、様々な文化の共存に向けて努力すること、これを台湾の新しいあり

方とする方向に向かいつつあるとみることはできないだろうか。

今回の現地調査で台湾の人々の生活や独自の文化に触れることができた。そこにはグローバル化するなかでどのようにすればよりよい生活を営むことができるのかを考えるヒントが隠されているように感じた。国家を越える広い地域に存在する多様な動きとネットワーク、様々なものとの深いつながり、こうしたものが暮らしの豊かさを支えているのではないだろうか。

最後に1年あまりの地域調査実習について振り返りたい。わたしたちの調査・研究では想像していた以上に専門性を求められた。たくさんの専門書や論文を参照しなければならなかったが、どこまで正確に読み取れたかはわからない。それでもこれまでにない新たな視座や考え方に触れることができた。また、みんなで役割を分担し、意見を交換して考えを共有し、まとめあげる作業に根気強く取り組んだことは、今後、各々の研究に取り組んでいくとき大きな力となるはずである。調査に協力してくださったすべての方々に深く感謝し、お礼を申し述べたい。

主要参考文献

〈はじめに〉

浅野和生『台湾の歴史と日台関係』, 早稲田出版, 2110 年

伊藤潔『台湾 四百年の歴史と展望』, 中公出版, 1993 年

周婉窈, 『増補版図説 台湾の歴史』, 平凡社, 2013 年

羽田正編, 小島毅監修『東アジア海に漕ぎだす1 海から見た歴史』, 東京大学出版会, 2013 年

若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』, 筑摩書房, 2001 年

〈第1節 台湾の言語状況調査〉

菅野敦志『台湾の言語と文字』, 勁草書房, 2012 年

片桐真澄「台湾原住民諸語を巡る諸問題と言語的共生への方策」, 『文化共生学研究』第1号(2003.3)

松永正義「台湾言語事情札記」, 『言語社会』1号(2007.3), 89-103 頁

〈第2節 台湾の媽祖信仰〉

朱天順『媽祖と中国の民間信仰』, 平河出版社, 1996 年

陳佳秀「台湾の媽祖信仰についての一考察: その意味象徴の変遷をめぐって」『鹿児島国際大学大学院学術論集』4(2012)

樋泉克夫, 「論文2 拡大する《中国世界》—媽祖信仰というカギで解いてみると—」

<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/tabunka/journal/1-4-2.pdf>

松本浩一「船人たちが伝えた海の神媽祖信仰とその広がり」, 松本浩一他『波騒ぐ東アジア (アジア遊学70)』, 勉誠出版, 2004 年

三尾裕子, 「海の女神『媽祖』」 https://www.sof.or.jp/jp/news/151-200/175_3.php

桃木至朗『海域アジア史研究入門』, 岩波書店, 2008 年

第3章 地域調査実習を検証する—成果と課題

地域調査実習を終えて教員として考えるべきことは2つある。ひとつは、わたしたちが用いた文献研究・言語学習・現地調査という方法が実際に成果を上げることができたか否かである。もうひとつは、学生たちにとって今回の台湾地域調査で何かを吸収できたかどうか、である。

文献研究では、学生たちは研究書を読んで理解するのにかなり苦労したようである。たとえば、媽祖グループは朱天順氏の『媽祖と中国の民間信仰』を繰り返し読んだはずである。それはぼろぼろになった本を見ても分かったし、発表会の原稿や報告書にもよく現れている。そのせいなのか、媽祖信仰が広まっている台湾ではみんな熱心にお参りしていると思いで、輔仁大学の学生たちの冷めた反応にひどく落胆している。それから、たくさんの文献を読んでさまざま学説や情報を知ったということと、それを理解して自分のものにしたかどうかは、別物である。混乱して、なかなか整理できないこともある。こういう苦労は誰もが経験することだ。報告書を見ると、朱氏の見解に影響されすぎたかもしれない。他の研究成果をもっと組み込むことができたはずである。

現地調査については、文献を懸命に読み込んだだけに、現地で実際に見た喜びは大きかったようである。現地調査の印象を尋ねると、即座に「楽しかった」という返事が返ってきた。「廟の大きさにびっくりした」「扁額の見事なことに驚いた」「線香がとにかくでかい」「熱気に圧倒されてしまった」「文献を読んでわからなかったことがわかった」など、目で見、耳で聞くことで、文献で得た知識が生きてきたのだろう。実際、どの意見交換会でも、学生たちは、日本語ではあるが、冷静かつ積極的に発言していた。気おくれた様子は少しも見られなかった。むしろ自分の疑問を率直に相手にぶつけて意見を交換する楽しさを感じたのか、いい表情をしていた。台湾の空気がそうさせたのか、それとも学生本来の姿なのかはわからないが、事前の文献研究で自分が何を知りたいのかがはっきりしていたこともあるだろう。もちろん、質問の内容は用意していた質問表に留まるものではなかったが。

学生たちは実によく観察していた。例をひとつ紹介すると、研究報告にあったように、小学校の台湾語の授業ではいくつか空席があった。別の教室で他の台湾語を学んでいる児童の席なのだが、確かに日本ではお目にかかることのない光景かもしれない。それを見てある学生は「別でもいいんだ。みんな同じことを習わなくてもいいんだ」と思ったという。こんな見方をするのかと感心したが、学生は自分の経験に照らして理解した意味を自分のなかに取り込もうとしたのであろう。これも現地に行かなければ起こりえないことである。

言葉についてはどうだろうか。学生たちは現地調査に行く前に週一回ではあるが中国語を学んでいた。それは役に立ったのだろうか。実際には中国語を使う機会はそう多くはなかったようである。意見交換の際、挨拶と簡単な自己紹介をした程度だったかもしれない。それでも学生たちはできるだけ勉強した中国語を使おうとする意欲を見せた。そうすると、相手が喜んで中国語で話しかけてくれて親近感がわいたという。また、街を歩いていると看板などが読めて緊張感も違和感もなかったということである。

中国語を使って調査を行うレベルまでには至らなかったが、台湾での経験が大きな刺激になったのは間違いない。みんな中国語の勉強を続けているし、なかには専門ゼミを変えた学生や媽祖信仰を卒論のテーマに決めた学生、2015年度の台湾調査実習（台湾南部で媽祖信仰を継続調査する予定）にもう一度参加して、卒論に必要な調査をしたいと考える学生もいる。さらには中国と台湾に留学を決めた学生も出てきた。台湾調査に参加した4年生は、中国語文献を利用して媽祖信仰を研究し卒業したのであるが、卒業前であるにもかかわらず、中国の厦門大学で行われた中国語学研修に参加して自分の中国語を磨いた。そして3月の楊朝傑先生の講演で見事に通訳の大役を果たして、教員と学生を驚かせた。

台湾から帰国後、調査実習の授業での学生たちの様子には著しい変化が見られた。発表に向けた原稿や報告書の作成に強い意欲を見せた。しかしながら、原稿の執筆には苦労したようである。「とにかく苦しかった。いいたいことはいっぱいあるのに、どのような順序で、どうまとめたらいいいのか、

わからない。」それでみんなの意見を聴いてみたくなって、話し合っていると「ポンと出てくるものがあつた」という。これはなかなかいい経験である。整理すること、話し合うこと、理解すること、それを表現すること、そのすべてに真剣にぶつかってはじめて見えてくるものがある、ということだろう。

このほか、1月の地域調査発表会に関する学生のコメントも興味深い。確かに緊張したし、初めて聴く一般の人にわかるようにするにはどう表現したらいいのか、悩んだが、発表自体は少しも怖くなかった。「積み重ねがあれば、怖くない」というのである。文献を一生懸命に読んで、言葉も学んで、実際に現地を見たから大丈夫だ、誰に質問されても答えられるものには答えればいいし、そうでなければ率直にそうと認めればいい、という考えに至ったのである。

研究報告の内容についていえば、研究は実に素朴な問いから始まったのであるが、できるだけ深く掘り下げて根源的なものを捉えようとする姿勢がみられる。たとえば、台湾の歴史を概観して、それが苦難の歴史であったことを知って、「このような経験は台湾の人々にとってどのような意味をもっているのだろうか」と大きな問いを見出している。言語グループを例に挙げると、この問いの答えを求めて、結論で次のように述べている。「調査を通じて一番驚いたことは、人々の逞しさ、力強さだった。幾度となく苦境に立たされ辛酸をなめてきた台湾の人々は、今では多様性を受け容れ、それを強みにしているように感じられる。言語の消失、変化、再出発は楽な道ではなかっただろうが、その辛さ、痛みこそが、それぞれがもっているものを大切に生きていこうという気持ちを生んだのではないだろうか。」研究報告最後の「おわりに」では、人の生活に近いところから問題の深層に迫ろうという姿勢が全面展開している。これは『地域学入門』で紹介された「生活からの視点」である⁷。

もちろん、学生たちの解釈が妥当であるか否かは、研究であるからきちんと検証し評価しなければならない。学生たちは解釈の根拠を提示しなければならない。それが学問的な作法である。したがって、厳しいことをいえば、今回の調査でそこまでいえるのか、ということになるのであるが、ここでは学生たちが今回の経験を通して、問題を大きく深くとらえ、なんとか見当をつけようと試みたこと、そうして果敢に切り込もうとした姿勢を評価したい。大きな問いと仮説なくして、意味ある成果は得られないからだ。あとは文献やデータ、現地調査などを通して問題と格闘し、丁寧に精緻に検証する態度と方法を身につける努力をすればいいのである。

成果があつた一方で、課題も残つた。振り返ってみると、できなかつたところが見えてきた。たとえば、媽祖信仰の場合、北港朝天宮の呉本信一さんのご指摘を活かしてもっと研究を深めることはできなかつただろうか。呉本さんは学生が取り上げた指摘のほかにも2つほどヒントをくださった。ひとつは媽祖信仰の起源をめぐる問題である。媽祖人神説にたつて福建省の湄洲島を発祥の地とする見解が有力であるが、起源を探る、起源を重視するという発想にしたがえば、湄洲島の媽祖が最も高い霊力をもつことになり、自ずと世界の各地から湄洲島参りということになる。国境を越えた広域的な媽祖信仰文化圏の中心地として湄洲島は特別な意味をもつことになるのである。中国政府が湄洲島の媽祖廟を支援しているのはそのためだと考えられている。そこに政治性が生じるし、実際そうなりつつあると呉本さんはいわれるのである。かつて中国の皇帝が「天上聖母」「天妃」「天后」などの称号を与えて媽祖を冊封し、皇帝を中心とする秩序世界のなかに組み込んだように、媽祖信仰は今日でもなお政治的な意味をもっていることを指摘されたのである⁸。

呉本さんはもうひとつ示唆された。島根県の隠岐の島に伝承があつて、航海の神である媽祖の靈験談とよく似たできごとが起こつた（ただし媽祖をうかがわせる女性の姿はない）ことが伝えられているという。しかもそれは湄洲島に媽祖とされる女性が存在する以前の日本の古い史料に記載され

ていて、そのことは戦前の著名な学者が指摘しているというのである（帰国後、紹介していただいた文献⁹で記述内容を確認した）。それが事実なら、媽祖信仰には媽祖人神説だけでは説明のつかないものがあることになる。もっと深層をみるべきなのかもしれない¹⁰。つまり、媽祖信仰についてはまったく異なる、実に興味深い解釈がありうるのである¹¹。

2つの指摘は、媽祖信仰を台湾だけでなく、東アジア世界で、あるいはもっと広い地域で、さらには、媽祖とされる女性が登場する時代よりももっと以前の時代から、検証する必要があることを示している。学生たちが呉本さんの2つの指摘を受けとめて、その方向に目を向けることができなかったのはなぜだろうか。学生たちの関心はもっぱら台湾に向かってしまった。

課題というのはこの点である。そもそも媽祖信仰を研究対象にしたのは、海域からの視点ということで、海を介して広域的に展開する文化現象として媽祖信仰に着目したのではなかったか。台湾の媽祖信仰を調査するのは、台湾における媽祖信仰のあり方とその今日的意義を明らかにするとともに、様々な文化の行き交う台湾を通して中国大陸や東南アジアとの複雑で重層的なつながりのありようを見ようとしたのである。

最初に明示したように、東アジアグループの地域調査実習の目的は、「つながりや関係性を見抜くまなざしを鍛えること」である。ここで少し付け加えれば、「身体感覚や感性をもって地域を知ること」である。この観点から振り返れば、今回の台湾調査では、渡航までの準備は効果的で、学生たちもよく頑張ったのであるが、実習の目的を達成するにはまだまだ工夫が必要であることがよくわかった。

おわりに

2014年度地域調査実習は、柳教員と柳原教員が組んで行った初めての試みだった。二人の専門は同じ歴史学だといっても中国史とフランス史でずいぶん異なっているし、柳原教員にとって東アジアはまったく専門外の領域である。柳教員の場合、地域調査実習は初めての経験だった。それだけにすべては手探りだったが、意外に楽しく進めることができた。不思議なことに、あれこれ話し合っているうちにいろいろなアイデアが浮かんできて、面白そうだ、やってみましょうという具合に展開した。

これまで学生たちのことを述べてきたが、教員にとっても大きな収穫があった。そのうちの1つを紹介すると、言葉に関して気づかされたことがある。今回、学生は中国と台湾の外国人留学生2名のほか11名が参加したが、そのうち1年間の留学経験がある者2名（韓国と台湾）、韓国語研修参加者2名、マレーシア英語研修参加者2名、台湾調査後に北米（アメリカ合衆国とカナダ）海外演習に参加した者2名である。さらにこのなかで中国と台湾への留学を考えている学生がそれぞれ1名ずついる。こうしてみると、台湾調査に参加したメンバーは、海外に出ることに抵抗感のない学生、あるいはそれがなくなった学生だといえるだろう。

既に述べたように、学生たちは意見交換会で臆するところなく発言していた。教員はいつもと異なる様子にとっても驚かされた。いつもこうならいいのと思いつつ、これこそ地域文化学科がこれから目指すべき姿かもしれないと考えた。高度な語学力は難しいかもしれないが、日常会話レベルの力があって、海外に出ることにためらいがない、外国の人達と関わることに抵抗がない、そういう感覚をもった人材を行政も企業も必要としているのではないか、この様子なら十分実現できる、そういう手応えを感じたのである。

最後に、「東アジアグループ」の地域調査実習はもっと大きな研究・教育計画のなかに位置づけられていることを紹介しておきたい。地域調査実習は授業としては1年間で終了する。学生との関係も授業とともに終了するのであるが、東アジアグループの場合、学生が希望すれば、3年生でも4年生でも参加することができる（もちろん中間発表会や地域文化調査発表会で報告するのは2年生だけである）。というのは、いくら頑張っても1年間では限界があって、調査の実質を得ることは難しいし、継続的に研究することはグループにとっても学生個人にとっても意義があると考えているからである。具体的なプランとしては、2015年度も台湾南部で媽祖信仰の調査をする予定である。それ以降は、学生との協議の結果次第ではあるが、台湾海峡を越えて対岸の厦門や福建省の湄洲島に、さらには華僑研究として東南アジアのマレーシアにまで拡大することもありうる。また隠岐の島や媽祖信仰の見られる長崎など、日本の各地に行くかもしれない。そういう息の長い研究を考えている。

もうひとつ別の連携も可能である。現在、中国や韓国の大学（協定校）との間で柳教員を中心にして語学・歴史・文化の短期研修プログラムを行っている。昨年度、地域学部の学生たちは中国や韓国で研修を受けたし、韓国からも地域学部にやってきた。今年は中国からもやってくる。学生は希望すれば研修に参加できるし、相手先大学の学生と交流することもできる。また両大学から引率で来られた先生には地域学部で東アジアに関する講演をお願いしている。他のプログラムでも東アジア関連の講演会・研究会を予定している。このように東アジアを知る機会をできるだけ提供して、学生たちが地域調査実習で得た関心と経験と知識をさらに豊かできるよう工夫している。すでに2014年度の台湾調査に参加した学生たちの多くが上記のプログラムに何らかの形で参加しているので、いずれは学生たちのなかから東アジアを国境にとらわれずに移動して仕事する人材が出てくることだろう。

¹ 地域学については、柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』、ミネルヴァ書房、2011年を参照。

² 本稿の執筆分担については、第2章の研究報告は学生たちが、そのほかについては指導教員である柳静我と柳原邦光が共同執筆した。最後に柳原が全体に目を通して、全体の語調を統一した。

³ たとえば、浜名優美『ブローデル「地中海」入門』（藤原書店、2000年）や水島司『グローバル・ヒストリー入門』（山川出版社、2010年）を参照。

⁴ 曹洋濤さん（中国）、薛鈺臻さん（台湾）、豊田成美さん（当時4年生）。

⁵ たとえば、『媽祖信仰文化皆在人文藝術國際學術檢討會論文集』（北港朝天宮、2013年）。この中には江戸期の日本における媽祖信仰に関する論文も掲載されている。

⁶ このような勧誘合戦によって生じた起源や由緒を巡る論争は他でも見られる。台湾国内においてもみられる。媽祖信仰は信仰だけではなく経済活動にも深く関わっている。

⁷ 家中茂「生活のなかから生まれる学問—地域学への潮流」、柳原邦光他編『地域学入門』、73～100頁参照。

⁸ 四方田犬彦氏は次のように述べている。台湾の媽祖廟が湄洲祖廟と直接交感できるようになったことで、台湾の媽祖信仰は新たな局面に入った。媽祖信仰の問題は、大陸から台湾にやってきた漢人たちの今日的なアイデンティティの再確認に深く関わっている。「台湾は政治的にも文化的にも大陸から自立した存在なのか。それとも大陸に崇高なる起源をもち、つねに大陸に回帰して文化的威厳を更新すべき存在なのか。媽祖信仰の問題はそのような二者選択を台湾の信徒たちに突き付けるだろう。」四方田犬彦『台湾の歓び』（岩波書店、2015年）、255～256頁。

⁹ 伊能嘉矩『臺灣文化志（上巻）』刀江書院、1928年、410～411頁。

¹⁰ この点については進香に参加した四方田氏の「進香の後の考察」が参考になる。四方田前掲書248～257頁。

¹¹ この問題については、学生たちも興味をもって、隠岐の島への追加調査を考えたが、学期が始まると教員も学生も多忙で、残念ながら実現しなかった。

